

◇平成24(2011)年3月15日 文教市民委員会

No.192 灰垣委員

お2人の活動体験、決意発表を聞かせていただいた後で、各論の質問をするというのは非常にやりにくいところがあるんですけども、2点お伺いします。そして、1点、要望させていただきたいと思います。

中学校給食を重ならない範囲でお伺いします。

1点目、教職員、特に先生は給食を食べられるのでしょうか。

2点目、調理員の体制強化というのは、配置基準にのっとってという先ほどご答弁がありました。人員体制はそれでしっかりしてくるんでしょうが、調理員数がふえるということで、当然、調理器具もふやさなくてはならないのかなど。それで、給食棟というんでしょうか、スペースはそのまま使うことになるので、十分それでいけるのかなという懸念をしています。この点についての認識をお聞かせください。

そして、3点目、来年度から2校で試行ということで、10月ぐらいのスタートになると聞いていますけれども、現在1年生が2年生に上がる、2年生は3年生に上がる。それで、1年生は入学をして、この4月の時点では皆さん弁当なりパンと、弁当方式ですけども、10月に一斉に給食になると。

ここで、非常に私は気にしております。視察等にも行かれたとお聞きしました。試行というか、移行期間がやはり課題であったということもご報告もいただいておりますが、この試行の2校、また平成26年度、全校でスタートするときも、当然、2年生、3年生は一度は弁当方式を経験されています。そういった意味で、こういった周知の仕方を、学校、また保護者、そして当事者である生徒の皆さんにどういう周知をされるのか。この3点をまずお聞きいたします。

No.193 中村保健給食課長

中学校給食のお尋ねでございます。

まず、学校の先生が給食を食べるのかということでございますけれども、現状の小学校給食と同様に、教室などで生徒と同じ給食を喫食することが生徒への給食指導や食育の推進などの面で効果的になることから、教職員も給食を食べるという予定でございます。

続きまして、給食棟の環境のことでございますけれども、親となる小学校ですね、調理場の給食器具につきましては、食数の増加に合わせ新たに増設するものや、効率的な器具に更新するなどの対応が必要になりますが、調理業務に支障を来さないよう、現有施設の改修も含め、整備してまいります。

また、中学校への配送コンテナの収納場所につきましても、同様に調理に支障を来さな

いように新たに設けることになると考えておりますので、よろしくお願いいたします。

続きまして、中学校給食実施に当たりましての生徒、保護者へのお知らせというか、周知についてでございますけれども、今後、その方法、周知等の手法につきましては、中学校給食試行校連絡会などで十分に検討を行いまして、まずは試行校の生徒、保護者の皆様に中学校給食の説明を行い、周知を図っていこうと考えております。基本的には、生徒へは学校から先生を通じて説明をいたします。保護者へは学校で説明会を開催していこうと考えております。説明会などでは、配付する予定のパンフレットで給食の必要性などの周知を図ってまいりたいと考えております。

なお、試行校の保護者への説明といたしましては、5月中旬を目途に概略の説明を、また試行の実施前には詳細な説明をしまいたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

No.194 灰垣委員

先生も給食を食べられるということで、先生だけお母さんがつくった弁当とか、奥さんがつくった弁当、またパンを食べているということではないということで安心しましたが、調理棟においても、スペースは、当然、人員もふえるわけですから、なかなか難しいところも出てくるんじゃないかなという懸念もしています。しっかり現場の声を聞いてもらって、調理員の声を聞いて、対応していただきたいと思います。

それから、我々も、この中学校給食に関しては導入を推進してきたところですが、本会議でも我が党からもお話をさせてもらいましたが、アンケートを見る限り、当事者である生徒は給食がよいという回答が15.3%ということです。保護者の方からいくと、このアンケートでいくと57.4%ということです。

中学校というのは、先ほどご答弁にもありましたけれども、思春期に入るとか、また心身ともに変化があるといった言い方をされていましたが、例えば、バスの運賃とか電車の運賃も小児用から大人に変わるんですね。それで、制服を着るといった感覚も、中学生本人にしたら、ある意味では大人という意識を持つと思うんです。もともと給食が全国で80%を超えているわけですが、小学校から中学校へ連動的にいくところはいいんですけれども、当然、高槻においては、一たん弁当を持っている子どもが給食に変わるといふことに、先ほどパンのお話もありましたけれども、ある程度抵抗が必ず出てくると。また、望まないという回答もあるわけで、ここでしっかりと生徒の皆さんに、給食というのはこういう意味でいいんだと。今、成人病というような、メタボリック云々という、将来的なことを考えても、食育の観点を含めて、この辺の周知の徹底をお願いしたいなど。移行期のこの2年間、また全校で導入される時期、またその後2年間、この期間が学校においては非常に混乱が予想されますので、どうかその辺、しっかりと考えていただきたいというふうに思っています。

もう1点、お母さんがつくった弁当といった感覚というのは、どうしてもある愛情みたいなものがあるのかなど。私も実はいまだに弁当を持参——中学校からずっと弁当持参なんですけれども、この中学校給食が導入されるということを機に、改めて朝食の重要性を認識するような取り組みも進めていただきたいと思います。ご承知のことでもあるかもしれませんが、朝食というのは、仕事や勉強には朝ご飯が大事だよという、先日、こういう記事が載っていました。東北大学の加齢医学研究所が行った分ですけれども、毎日食べるという人の一つの目的は、家族で過ごす時間を大切にすると、こういった記事がありました。また、家族内でできるだけ話をする時間や機会を持つと。60%を超えるこういう支持があったようです。そして、この記事の中には、毎日朝ご飯を食べる人は幸福度が67.5%、ゆとり度が59%、生活満足度が65.9%と。食べない人というのは、幸福度は7.7%、ゆとり度が6.6%、生活満足度が7.1%と。非常に差が出てきています。そういう意味で、改めて早寝早起き、朝ご飯というキャッチがあるわけですから、どうか朝食を、この中学校給食が導入されるというのを機会に、ひとつ前向きに取り組みを進めていただきたいと思いますということを申し上げておきます。

給食に関しては以上です。

2点目は、学校現場。今、いろんな行事に参加させていただくと、非常に若い先生が見受けられます。非常に元気のいい、そういった姿が見受けられるわけですけれども、学校現場も随分さま変わりしたなど、こういう感想を持っています。現在の高槻市内の学校の教員の皆さんの年齢構成というのか、これはどうなっているのかということ。そして、過去5年間ぐらいを見て、退職者、要するに新規採用者の数もふえていると思いますけれども、当然、団塊の世代云々という影響もある中で、どういう構成になっているのか。そして、そのことに対してどういう認識をお持ちなのか、お聞きしたいと思います。

No.195 能村学校教育室参事

灰垣委員のご質問でございますけれども、本市小、中学校の教職員の年齢構成は、いわゆるワイングラス型と言われる中間層の年代が非常に少ない構造となっています。これは、団塊の世代の大量の退職が始まったところから、新規採用者の数が増加したためで、過去5年間では、毎年100名ほどの新規採用教職員が高槻市に配置されています。しかし、必要数には達しておらず、欠員への対応は講師を配しているのが現状でございます。

以上でございます。

No.196 灰垣委員

新規採用という方たちは、すべて大学を卒業したばかりの教員ということになるんでしょうか。それが1点。

そして、必要数に達していないので講師を配置していると、それで補っているという回答でしたけれども、講師とはどのような位置づけで、どれくらい小、中学校に配置されているのか、お聞きします。

No.197 能村学校教育室参事

新規採用者でございますが、これは大阪府のほうが採用するわけでございますが、大阪府の教員採用試験は一般枠、社会人枠、教職経験者枠など、経験、年齢を問わずに幅広く人材が確保できるようになっております。また、講師とは、教職員免許状を持ち、地方公務員法に基づき、期限付きで任用される臨時的職員で、欠員の場合のほか、産前産後休暇、育児休業、病気休暇などの教員の代替として配置されております。その中でも、欠員補充の講師の割合としましては、平成23年度は小学校の欠員が約4%、大体50名程度でございます。中学校が約17%、95名となっております。この傾向は、数年間は続くと考えられておまして、講師の力量を高めることが重要な課題かと考えております。

No.198 灰垣委員

新規採用の方は、大学出であろうが、一般枠であろうが、経験が浅いということになってくると思うんですけども、こういった経験の浅い先生、また講師、どのぐらいの人がいるのかということですね。パーセントは先ほど大体お聞きしました。この方たちに対して、当然、育成が必要になってくると思うんですけども、どのように考えて、それらの課題をどのようにとらえて、どのような育成を考えていらっしゃるのか、お聞きします。

No.199 中西教育センター所長

経験の浅い教員や講師の育成についてのご質問にお答えをいたします。

平成23年度の時点で、小、中学校の教員のうち、採用5年以内の教員が約500名、10年以内の教員となりますと約800名ということになっておまして、全教職員の約半数を占めております。このように世代交代が進む中、経験の浅い教員の育成は大変重要な課題であると認識をしております。

教育委員会としましては、研修権を有する中核市の教育センターとして、独自の初任者研修はもとより、2年目から5年目までの教員や講師を対象としたフレッシュ研修というもの平成17年度から実施するなど、この間、市として独自に若手教員の育成に努めてまいりました。また、研修後には、受講者にアンケート等も実施するなどいたしまして、より効果のある研修を目指して計画的に実施をしておるところでございます。

今後は、これらの若手の教員が各学校で中心的な役割を担っていくようになることも踏

まえまして、他の研修等におきましても、教員としての責任をしっかりと果たしていけるように、研修内容のさらなる充実を図るとともに、教育センター指導主事によります学校訪問支援等も行っていく予定でございます。

No.200 灰垣委員

若い方たちが非常に多いと改めて認識をしたわけですがけれども、昨年の4月の時点で、ある中学校で入学早々に教員不足で自習をせざるを得ないというような、そういった実態もあると聞いています。人員不足に関しては、大阪府教委と調整していただかなくちゃいけないんでしょうけれども。この年齢構成をワイングラス型というふうに表示されました。いただいた資料を見ますと、56歳ぐらいから62歳ぐらいまでをワインのグラスの下、フットというんですか、に当たるのかなと。そして、41歳ぐらいから55歳ぐらいまで、ここが柄の部分ですね、ステムというらしいですけど。そして、20代、23ぐらいから41歳ぐらいまでがこのカップ、ワインを注ぐ、そういった意味でワイングラス型と言われたんだと、改めてそういうふうに思いましたけれども、中核市だから独自で本市は研修ができると、そういう工夫もしているということです。

ただ、本来、この41歳から53歳と、この不足に関しては、どういう団体も今の組織が大体そういう形になってはいるんでしょうけれども、本来、後輩の方たちを指導する立場にいらっしゃるんだらうなということを考えると、将来的に非常に不安を覚えておりました。

が、先ほどから出ていました、昨日の卒業式、私も地元に出させてもらったわけですが、卒業生の決意の言葉というのがありました。4クラスあって、4人の先生に対してのすごい思いを語られていました。本当に私たちは先生のおかげでこの3年間を過ごせましたと、こういった本当に涙を押さえるのがどうしようもない状況だったんですけれども、すすり泣くというか、会場全体がもううねるような、そんな感動の中での卒業式でした。

先ほど言いました、ちょっと心配をしていたわけですがけれども、この卒業式を見る限りは、リーダーである校長先生の当然リーダーシップ、またそういう若い人たちのエネルギーというか、情熱と、そういったことが今の教育現場を支えているのかなというふうに、改めてきのうは感じたところです。

私事ですがけれども、平成8年から地元の小学校で2年間、その後3年間PTAの会長を務めさせてもらったんですけれども、自分の子どもが卒業するときですらそんな感動を覚えたことがなかったということを考えれば、教育現場も先生、昨日の何かややこしい報道もありましたけれども、非常に先生方が熱意を持って教育に携わっていらっしゃるんだということを改めて感じさせていただきました。

しかし、この先、やはりそういった若い人たちが育っていく中で、当然トップに立たれ

る、上のほうに来られる方たちが減少していくことを考えれば、継続も含めた現場での指導みたいなもの、研修も大事ですけども、現場でのこういったつながりというか、そこでの指導というのもやはり検討していくべきじゃないかなと私は思います。

教師が変われば子どもは変わると、皆さんもご存じのように、大人が変われば子どもが変わると。子どもにとっての最大の教育は大人自身であるということを考えたときに、この教師の皆さんの力量のアップに期待をさせていただきたいと思っております。

最後に1点だけ要望させていただきます。

先ほどの読書の関係ですが、昨年10月の調査で読書に関する全国世論調査、これは1か月間に本を1冊も読まなかった人が50%を超えていると、これは3年連続ということなんです。そんな中で、100万冊云々、また図書標準の達成ということもそうですけれども、本市はブックスタート、生後4か月から本に親しむのを皮切りに、連続して読書環境を整えているというのを改めて今回勉強させていただきました。列挙するだけでも13項目ほど読書に関する取り組みがありました。そういう意味で、先ほど宮田委員のほうからも子育て支援という観点からも読書活動は非常に重要であるということ、また高槻のアピールできる一つのツールであるというふうに思っています。

冒頭に市長が、「住んでみて良かった街ランキング」、昨日SUUMOが発表していました。高槻は1位だと、2年連続だと。非常に誇らしいことです。でも、残念ながら、「住みたい街ランキング」11位ということになっています。住みたいまちにするためには、やはり教育という部分に関しては、よく茨木と比較されるんですけども、ここにも力を入れていかなくちゃいけないと思っています。

それが1つと、この読書環境のすばらしい部分をもっとアピールしていただきたい。市長の言う、訪れたいまち、住みたいまち、住んでよかったまちといいますか、これをどんどんアピールしてほしいと思っています。歴史のまちでありますし、また高槻は医療、健康の分野も非常に優れておりますから、それプラスやっぱり子育て支援、施政方針にも、住居の検討もするというようなこともおっしゃっていましたが、子育て支援策を日本一の、そういった思いで取り組んでいただきたい、またそれをアピールしていただきたいということを申し上げまして、私の質問を終わります。

以上でございます。